

福井県養護教諭研究会「サポート隊」の活動

福井豪雨被災した子のケアに奔走

災害による心のダメージは大きい。それに年齢の差がないとほぐれ、成長過程にある子どもには大きな傷となる。今年の夏、鹿児島県で開かれた全国養護教諭研究大会で、福井県養護教諭研究会(会長=杉川美栄子・福井県立大野東高校養護教諭)の定永真由美養護教諭(福井県立春江工業高等学校)は2年前の福井豪雨の際、被災した子どもの心のケアに取り組んだ「養護教諭サポート隊」の活動を紹介した。「雨音を聞くと怖がる」「悲観的な話ばかりする」子どもたちに心と体の両面で支援し、復興を支えた。サポート隊の活動を紹介する。

心と体の両面で

平成16年7月に福井県会員に参加を呼び掛けた。児童を中心に本の読み聞かせや折り紙をしたり、かせや折り紙をしたり、として何かできないか」活動は7月から8月の被災体験を話す子どもに復旧作業が進む中、県17日間。延べ108人の内養護教諭334人で会員が、福井市、美山町、今立町内の6つの小学校会の役員らは話し合つて活動した。

夏休みであったが、大人は復旧作業に追われて、いたため、学校で児童を

メージは大きい。早期に預かる学童保育が開始され、対応しないとPTSDなれていた。児童の中には、「落ち着きがない」「だつとも懸念される」。被災

子どもの心のケアを目的と心的な影響が見られた。た。県はサポート隊の存するサポート隊を組織し、サポート隊はやさしくした在を各学校に通知。サ

ポート隊は県を通じ要請のあった学校に派遣された。

「大切なことは子ども

の様子を継続して観察す

ること」。役員の1人だった定永養護教諭は話す。

しかし、毎日同じメン

バーを派遣するのは難し

い。そこで子どもの様子

を書き継ぎノートに記録。次に隊員や被災校の教員に分かれるよう、1日

の活動や気になった点などを詳しくメモし継続し

て見守る体制を整えた。

災害時には家庭訪問などを行はずとの現状を把握しなければならない

が、被災校の養護教諭は

学童保育の子どもへの対応で家庭訪問に同行でき

ない状況にあった。こう

した問題も隊員が入ることで可能となり、専門的なアドバイスができた。

このほか、同研究会では、子どもの心の状態を調べるためのチェックリ

ストや災害後に起きた子どもの変化と対応策を記した保健便りを作成し、データを被災校に提供した。対応に追われる現場ですぐに活用でき好評だったといふ。

定永養護教諭は「子どもの心と体の両面から支援できる養護教諭の専門性を生かした活動だった」と当時を振り返る。

研究会は昨年、サポート隊の活動を検証し活動や運営方法、派遣のシステムなどを整理し報告書にまとめた。これを各都道府県や全国の養護教諭研究会などに配布した。

大雨の被災に遭った長野県の研究会も福井の例を参考に活動したなど、各地から感謝の手紙が寄せられ、活動が全国に広がった。

杉川会長は「自然災害ははじにでも起きる。多くの人に利用していただければ」と話している。

報告書の問い合わせ=福井県養護教諭研究会 □0779・66・46

継続して見守る体制つくる

大雨の被災に遭った長野県の研究会も福井の例を参考に活動したなど、各地から感謝の手紙が寄せられ、活動が全国に広がった。

杉川会長は「自然災害ははじにでも起きる。多くの人に利用していただければ」と話している。

報告書の問い合わせ=福井県養護教諭研究会 □0779・66・46

福井豪雨で活動 「養護教諭サポート隊」

子供の心ケニア 経験を冊子に



「身の不調を現した見立てである。

部会でまとめて
豪雨での支援活
=福井市成和中

れを次への教訓にしておいたが、この悲惨な体験につづかれて、それが三ヶ月がかりで報告書となり、その後同部会の役員ら「心のケアにかかる叢書」をまとめた。論文の支援活動「支援活動」を中心とした報告書にはサヘル一隊結成の経過、派遣システム、支援活動の実際、活動の評価と課題など、参加した教員が直面した悩みなどを詳しく述べた。

を考えても、事故は自然災害論は」といふことが引

四百八

書き込んだ

三福井市成和中
レ 諭 価 杖 成

部会でまとめた
豪雨での支援活

卷之三

卷之三

卷之三

10

25

卷之三

100

10

卷之三

卷之三